
永久に近い短さ

二階藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久に近い短さ

【Nコード】

N8706E

【作者名】

二階藤

【あらすじ】

認識しようとせず、ただ悩み、考えているある男の心情を描いた話。

（前書き）

長くもなく、短くもなく。

まずは、まったりと読んでいただければ幸いです。

その日、その男は、混乱していた。

昨日まで……いや、実際には、それよりも前からだったのかもしれないが、

確かに、そこにいたはずの人の姿を見ることができなくなったからだ。

見ることができなくなった理由は、考えるまでもなくわかっていた。ただ、実際にいなくなり、目の前からいなくなるその瞬間を認識するまでは、
いなくなるはずもなく、いなくなることで自体が現実だと思えていなかったからだ。

そんなことは、過去から幾度からあった。

ある人とは、わずかな時間の別れ。

また、ある人とは、長い長い時間の別れ。

別の人とは、永久に交わる事がなくなる別れでもあった。

男が認識しようとしなかった別れというのは、時間にしたら僅かな別れなのかもしれない。

永久に分かれるわけではない。

二度と会えなくなるわけでもない。

考えれば、本当に僅かな、男の生きてきた時間の中でも些細な時間だ。

だが、男にとって、些細な時間の別れであつたとしても、その別れにいたるまでに共有してきた時間というものが、

過去に分かれたどんな人間、物よりも、重く、長いものであつた……

それこそが、

男が、別れを認識しようとせず、ただただ、わからなくなってしまう理由なのだろう。

男は、その話を人にしようとはしなかった…いや、できなかった。人に話して、面白いような話でないことは、十分すぎるくらいにわかっていたし、

何よりも、自分の口から、それを発言することを恐れていた。人に言えば、楽になる部分があつたとある。

でも、それを人に託すだけの勇氣を持てなかった。

ある日、男は、あつたばかりの人間に、その話をさりげなくしてみることが成功する。

相手の反応は、その重さに対して、決して軽いとはいえないが、重くない発言で返す。

「俺にも、そういう別れはあつた…けど、仕方がない」

男にとって、その言葉は、救いにもなつた。

少なくとも、あれこれと考えて、無駄な時間をすごしていた瞬間よりも、

はるかに有意義で、はるかに価値のある瞬間を手にしたのだった。

この男にとって、今回の別れは初めではなかった。

極々最近、突発的な形ではあつたが、同じような別れが発生した。

そのときの男は、感情を殺し、冷静さをただ保つ…それだけに従事すると決めていた。

…男にとって、そのときの別れのまま、今の別れにつながっていれば、

悩むことも、考えることも、別れを認識せずに目をそらすこともなかったのかもしれない。

永久の別れではない短い別れ。

共有してきた時間で考えれば、もっとも長い別れ。

男にとっては、再会のときが訪れるまで、永久の別れと遜色のないものなのだろう…。

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

気分転換で書かせていただいた短編ではありますが、感想などありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8706e/>

永久に近い短さ

2010年10月8日21時53分発行